慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「至高性」とはなにか : パタイユあるいはpassageの笑い
Sub Title	Qu'est : ce que "le souverain"? : Bataille ou le du Passage
Author	細貝, 健司(Hosogai, Kenji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1994
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.66, (1994. 7) ,p.145(34)- 160(19)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00660001-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「至高性」とはなにか
——バタイユあるいはpassageの笑い——

細　貝　健　司

ジョルジュ・バタイユはその全著作にわたって「至高性（la souveraineté）」についての言及を繰り返す。そしてそれは説明が加わるごとに却って判りにくくなってしまうという逆説的な結果をしか我々読者にはもたらしてくれない。しかしそれは多分，その用語に元来的に彼が吹き込んだ意匠の当為なのだろうし，だから，バタイユを読みつつ昏迷の森に彷徨い込むのは，或いは彼の著作の正しい読み方なのかもしれない。

Derridaの指摘を待たずとも(1)，バタイユ理解の鍵となる概念である「至高性（souveraineté）」は、その語元来の意味からしても，精神現象学に於けるHegelの《Herrschaft》のフランス語訳である《maîtrise》と切り離して考えることが出来ないのは明白である。1934年から五年間に渡って，Kojèveが開いた精神現象学の講義に熱心に出席をしたあとにバタイユはそれまでの著作とは大分趣が変わり，理論的に整理された感のある三部から成る「無神学大全（La Somme Athéologique）」を書き上げることになる。Kojèveの斬新な解釈によって瑞々しく先鋭な思想となったHegelがバタイユにある重要な影響を与えたのは明らかであり，例えば，件の著作以降，バタイユが理性の重要さをことさらに強調するようになったところにも，その影響の一端を見てとることができよう。

しかし，Hegel思想がバタイユに及ぼした影響の大きさを測るのは本論の趣旨ではない。それは一つにはそのような考察が限られた紙数の中では不可能だからでもあるが，同時に，Hegel的な要素を総て捨象しても，バタイユの名以外は冠し得ないひとかたまりの要素は残るはずであるし，まさにその固有性をこそ私は考察の対象としたいからである。

1. 否定性をめぐって

さて，バタイユがHegelから学んだ最大のことは，「否定性(Négativité)」という概念の用法であろう。

Alexandre Kojèveによれば，動物から人間への移行は「自己感情(Sentiment de soi)」から「自己意識（Conscience de soi)」への移行と換言できる。欲望を持つ存在である動物（animal-humain）は，欲望の対象を内面化するために（例えば食べ物として取り込むために)，対象を自分に適うように変質させなければならない。それは既に対象の「否定(négation)」であり，欲望の側から見れば目的に沿った「行為(action)」なのである。しかしこの欲望が自身を取り巻く「自然的」非―我（non-Moi naturel）に向かうかぎりにおいてこの自我自身もまた「自然的」自我（Moi naturel）に留まってしまう。この欲望が動物的欲望(désir animal）と呼ばれる所以がこれである。ここでは未だ人間は「自己感情」に留まっている。さて人間が真に人間になるためには，言い換えれば「自己意識」が「自己感情」から生じるためには，人間的欲望(désir humain）が動物的欲望（désir animal）に打ち勝つことが必要である。そのための唯一の手段は，動物的欲望の究極の価値である自己保存の欲望を人間的欲望に基づいて危険に曝すことである。そしてそれは全く新たな形の「否定性」の存在を必要とするのである。(2)

「ヘーゲル，死と供儀」の中でバタイユはヘーゲルを援用してこう語っている：

> ヘーゲルにとって，人間の悟性［entendement de l'homme］が（つまり言葉や言説が）全体［Totalité］から，それを構成する要素を引き離す力［force］（つまり，比類なき力［puissance］）を持っていた，ということは，非常に重要なことであると同時に，全くもって驚くべきことである。(…) それらを分離することは人間の否定性［Negativité humaine］が自然［Nature］に対して差し向けられた

ことを意味する。そのことについて，私は今までそこから決定的な帰結を引き出さぬままに語ってきた。[3]

つまりここでバタイユは「自己感情」から「自己意識」を導き出す「否定性（Nêgativitê)」を「悟性（Entendement)」へと帰しているのだ。事実，これに続く部分で，バタイコはこのNêgativitêを「悟性である否定性(Nêgativitê de l'Entendement)」とはっきり呼んでいる。この「悟性である否定性（Nêgativitê de l'Entendement)」[4]は常に自己を超出しようとし，他者の欲望の対象となる価値に取って代わろうとする限りで《active》であり，その「否定性（Nêgativtê)」を所持する存在は「主(Maître)」の名を冠せられることもある。しかし，自己を超出しようとする限りにおいて，常に目的（fin）は自らの外にあることになる。そして，もしも，自らの外にfinをもつことが「自己意識」を産み出す条件なのだとするならば，その「自己意識」という存在は自らの外部に目指すべきfinがない限り「存在」できないということではないのか。観点を変えてみれば，自らのうちにfinを持てない存在とは，外部のfinに従属している存在なのではないのだろうか。[5]こういった存在を果して「自律的な(autonome)」存在と言えるのだろうか。これがバタイユの提示する問題点なのである。

例えばMaîtreの「死」への接し方を例に取れば，Maîtreは「死」に相対しながらも生を保持し，「死」の中へ没入することはない。それとは反対に，「死」を間近に見る経験をすることで自らの「生」を「死」に対する意味（sens）として肯定するのである。そして，この操作を通じて「死」は止揚（aufheben）される。このようにMaîtreは「死」という外部を通じてでなくては自己の確実性（certitude de soi-même）を確保できない。つまり，自らのアイデンティティを保証するものは，常に外部にしか存在しないということである。動物的秩序からは独立しているがゆえに《Maître》と呼ばれた存在が実は，《sens》からは自由になれないがゆえに，全く以てautonomeな存在，つまり，至高な（souverain）存在で

は無いことがここで明らかになってしまうのである。この事実をもしも「奴（Esclave）」が知るところとなったらどうなるであろうか。それはMaîtreの突然の権威の失墜を招くであろう。それは一種の喜劇となるはずだ。しかし，逆説的であるが，この喜劇こそが，いや，正確には，この笑いこそが真の意味で《souverain》なのである：「もし私がそうしたいと思うならば**笑うこと**は考えることである。だがそれは，一つの至高な瞬間なのだ。[6]」

《souverain》なものが笑いと密接な関係を持つことはバタイユの再三繰り返すところのものである。我々はどうやらバタイユの笑い（rire）についての考察に移行しなければならないようである。

2．至高なる笑いとはなにか

バタイユは，これまでに考察したHegelの主と奴の支配関係をピラミッド的な構図へと置き換えることによって，人間の本質と，真に《souverain》なものの在り方を説明しようとする：

> 一般に，宇宙のあらゆる孤立しうる要素は，つねに，その要素を超越する一つの全体の中に合成要素として入ることのできる個（particule）として現れる。存在者（l'être）とはつねに，相対的な自立性の保たれた個々（particules）の一全体なのである。[7]

各々の存在（chaque être）において，単一性（unité）というのがそれぞれにとっての本質的な属性なのであり，そのunitéを持つがゆえに存在同士が構成する集団の中で相対的な自立性を保っているのである。この相対的に閉じた各々の存在は「自己存在者（l'être ipse）」，或いは単に「自己（ipse）」と呼ばれる。[8]しかし一方，それぞれのipseはそれ自身で自らを超える全体，宇宙（univers）とも呼ばれるような全体になりたいという欲望をも密かに抱いているのである。つまり，ipseには現在の相対的なautonomieを保ちたいという欲望と，自分独りで全体になりたいと

いう相反する欲望が混在しており，ipseであるがゆえに理論的に普遍的（universel）になりえないipseは常に自身を不充足（insuffisant）であると感じているのである。これが総ての存在の根底にある「不充足の原理（principe d'insuffisance）」と呼ばれるものである：

> 自立性（autonomnie）と超越性（transcendance）との不確かな対立関係が存在者（l'être）を足元の極めて危うい立場に立たせる。存在者は自立性の中に閉じ込もるが，それと同時に，閉じこもるという事実からして，各々の自己存在者（chaque être ipse）は超越するものの全体（le tout）になりたいと望むのである。最初は自分が部分を成す合成（composition）の全体になろうと望み，それから，いつかは，際限もなく，宇宙の全体に成ることを望むのである。(9)

この不充足を満足させるために，自己存在者は自分より高い階梯にある上位の存在者（l'être supérieur）に自らの「存在（être）」を託して，そこに束の間自らの全体性（totalité）が達成されるのを見ようとするのである。しかし，この上位の存在も相対的に高次にあるに過ぎず，だからそれ自体ももっと高次な存在者に参与しなければならない。だから，真の《totalité》は，究極的にはこのピラミッドの頂点に在る存在者にしか求められないはずである。このピラミッドの頂点に在る存在者，「至高かつ全一的存在者（l'être suprême total）」とは，一般的には「普遍的なる神（dieu universel）」と呼ばれている。だから，この構図を巨視的に見れば，自足しえない《l'être ipse》が自らの「目的（fin）」をsouverainな存在者である《l'être suprême total》に求める，ということになる。

さてここで笑いが起こるのである。《l'être suprême total》が，《l'être ipse》を笑うのである。もしも，バタイユの笑いが優越感の表明であるとするならば，ここでは神の座にある《l'être suprême total》が，《l'être ipse》の不充足を笑うという構図になるであろう。しかし，バタイユの「笑い（rire）」はそういった優越感を示す笑いではないのである。バタイ

ユの《rire》は「崇高な笑い（rire divin）」と称される。それが《divin》であるのは，笑い手（rieur）が，有限性が明らかになったために笑うべき（risible）存在となった他者に自己を同一化し，相手とともに自らも失墜して，その自らの失墜を笑うからこそなのである。

Mikkel Borch-Jacobsen はバタイユ論である「存在（へ）の笑い（Le Rire de l'être）」の中でこう指摘する：

> （…）もしも，悲劇的に失墜する者に対して同情を感じるにもかかわらず笑ってしまうことが崇高（divin）なのだとするならば，それが意味することは，笑っている神がその笑いの対象となる他者（l'autre）に自己を同一化しているのだということであり，だから，その神が，苦しみ，そして死んでしまうその他者と共に「自分自身」が失墜していくのを笑うがゆえにいっそう崇高なのだ，ということである。[10]

一方，笑いは自己存在者の側からも起こるのである。「至高かつ全一的存在者（l'être suprême total）」とは自己存在者にとって《fin》であり，自らの「最終的な意味（sens ultime）」である。彼はピラミッドの頂点に自らの「存在（être）」を投企することで自らの totalité を束の間でも獲得せんとする。しかし，真に《souverain》な存在を目の当りにできると期待したその頂上で彼が思い知らされるのは次のような真理なのである：

> 実際のところ，存在は正確には**どこにも**なく（nulle part），個々の存在者たちのピラミッドの頂上に，**神的なもの**（divin）として存在を捉えようとするのはひとつの遊戯であった。[11]

自らを自己の外部に投企し（se projeter），自らの存在（être）の sens を他者（l'autre）から得ようとするが，その至高なる他者の座に身を投じたときに判ることは，自らを保証してくれると見えたその他者すらもが

《L'être est nulle part.》という定理に支配されており，それ自身の内に《être》を持つ autonome な，或いは suffisant な存在ではないのだ，ということである。この事実の開示により，《l'être suprême total》と見えたものの失墜（chute）が起こり、そこに「笑い」が生じるのである：

> しかし笑いは，現存在（l'existence）の周辺地帯にのみ達するのではない。それは単に馬鹿正直な人間や子供（空虚になってしまった者，あるいはまだ空虚である者）だけを対象とするのではない。不可避な顛倒によって，笑いは子供から父親へと，周辺部から中心へと，父親や中心が自分たちの不充足さ（insuffisance）を暴露してしまうときに，戻って来てしまうのである。(12)

しかし，この笑いも優越感の笑いではない。それは突然に与えられた価値の下落に起因するものではあっても，己の他者に対する優越感の表明である「笑い」とは全く異質のものなのである。それは，自らの《fin》として，完全に自己同一化し，もうひとりの自分自身であった存在（バタイユがしばしば用いる言い方に倣えば，自らの《semblable》）が，「全体性（totalité）」から「無価値（nullité）」へと墜落するのを見て，もうひとりの自分が発する「笑い」なのであり，つまりは，自分自身をもうひとりの自分が笑う「笑い」なのである。これは，最初に考察したピラミッドの頂上から下向きに発せられた「笑い」と同様である。

いずれにせよ，Borch-Jacobsen も指摘するとおり(13)，他者（l'autre）の不充足（insuffisance）を笑うということは，自分自身を他者として笑い，他者を自分自身として笑うことであり，この瞬間に「私」は自分自身であると同時に「他者」でもあるのである。そして，この「笑い」の瞬間，つまり，「私」が自分自身であると同時に「他者」でもある瞬間こそが，fin を託すべき外部を必要としない完全に《autonome》な，ゆえに《souverain》である瞬間なのである。

3．供犠と笑い

さて，こうした《souverain》な瞬間が開示されるに当たって，もっと大掛かりな仕掛けが必要である場合もある。「供犠（sacrifice）」がそれである。実際，バタイユは，この供犠の瞬間を特権視し，そこに《souverain》なものを求めようとする。しかし，このことは「笑い」の瞬間と同様に，「供犠」の瞬間においても「至高性」が開示されるのだ，ということを意味するのではない。「至高性」の開示にはある定まった条件が必要なのであり，だから，もしも「供儀」の瞬間が《souverain》であるのならば，それは「供犠」が「笑い」と同じ構造を持っているからである筈なのだ。事実，「供犠」と「笑い」が同質なものであることをバタイユは強調している。次の断章においては，「供犠」の布置をなぞるように「笑い」が併置されているのを見ることができる。

> (…) 供犠には犠牲者（victimes）だけでなく，供犠執行者（sacrifiants）が必要である。笑いは私たちという笑うべき人物（personnages risibles）のみを要求するのではなく，それは，笑い手たち（rieurs）の無分別な一群をも望むのである…(14)

上記の図式に従えば，「笑い」に於ける「笑うべき人物（personnages risibles）」，「笑い手（rieurs）」は，それぞれ「供犠」に於ける「犠牲者（victimes）」，「供犠執行者（sacrifiants）」に対応していることになる。

さて，供犠（sacrifice）に於いて、供犠執行者（sacrificateur ou sacrifiant）は犠牲者（victime ou sacrifié）を死に至らしめる。その死には，文字通り，共同体の安寧を得るために神に捧げられる「生贄」の意味もあろう。しかし，同時に，これはもっと本質的なことなのだが，供犠執行者は犠牲者の死を利用して，「死者の彼方（l'au-delâ du mort）」へと行こうとするのであり，そのための「殺害（meurtre）」でもあるのだ。もっと正確に言えば，供犠執行者は単に犠牲者を殺すのではなく，死にゆく

犠牲者と自己を同一化し，犠牲者の「死」を自らの固有の死として「生きる」のである：

> 供儀において，供犠執行者（sacrifiant）は死に襲われる動物と自己を同一化する。このように，供犠執行者は自らが死ぬのを眺めながら死ぬのである。それも，いわばおのれの意志から，進んで供犠の剣を振るい，死んでいくことにさえなる。しかし，それは喜劇（comédie）だ！[15]

つまり，犠牲者の「死」をもう一つの自己として自らのうちに取り込むことによって供犠執行者は自己を二重化し，「自らが死ぬのを眺めながら死ぬ」のである。この構造は言うまでもなく，我々が前章で考察した「笑い」の構造と全く同じものである。実際にバタイユ自身がこれを《comédie》と称しているのに注目してもらいたい。ここでこの劇が《comédie》であるのは，他者の死を自分の「固有の」死として「生きる」からであり，もっと言うならば，既に自分のものとなった他者の死を自分が「笑う」からである。自らの「死」を自らが「笑う」からである。それをみて観客は笑い，そうしてその瞬間にこそ「至高性」はほんの一瞬輝くように開示されるのである。

Jacques Derrida は次のように語っている：

> 「至高性（la souveraineté）」をおのが死に対する関係の内に設定する「笑い」とは，かつて誰かが指摘した如き「否定性（négativité）」ではないのだ。そして笑いは自己を笑う。或る「高次の（majeur）」笑いが或る「低次の（mineur）」笑いを笑うのである。というのも，至高な作用（opération souveraine）もまた，自己を享受することによって自己へと関係付けられるために，生を——先の二つの生の橋渡しをするもう一つの生を——必要とするからである。したがって，至高な作用は或る方法によって，絶対的な危険（risque

absolu）を擬態（simuler）しなければならず，その上で，この擬態（simulacre）を笑わなければならないのだ。[16]

「死」に直面し，それを aufheben するのでもなく，その中に入り込むのでもなく，「死」を擬態しながら、その擬態自体を笑う瞬間，つまり，供犠の場合と同様に，自己を二重化し，「死」そのものである自分をもう一つの自分が笑う瞬間，位相の異なる二つの自己の間を自由に往復するがゆえに，自らの《fin》をもはや外部に求める必要のない瞬間，いやむしろ，外部自体が消失してしまい，ゆえに「絶対的全体（total absolu）」である瞬間，それこそがまさしく《souverain》なのだ，と Derrida は言いたいのではないのか。

4．「笑い」の正体を探して

しかし，バタイユの《rire》とは，果して「笑い」なのだろうか。それは我々が一般に「笑い」の名の許で共通に感得している現象と同じものなのであろうか。自らの不充足（insuffisance）を，或いは，自らの「死」さえもを自らが笑うこと，それは果して「笑い」であり得るのであろうか。それとも，Sartre が指摘するように[17]，それはバタイユの「独断的決定（l'arbitraire dĕcision）」によって故なくたまたま《rire》と名付けられたに過ぎないのだから，我々はそこから「笑い」とは全く異なるコノテーションを引き出すべきなのだろうか。

いや，しかしそれはそうではない，と私は言いたいのだ。バタイユの《rire》はやはり《rire》以外の何者でもないのだ，と。

Baudelaire は「笑いの本質について」の中で，「笑い」について考察し，他人に対する自らの優越感の表明である「笑い」を「有意義的滑稽さ（le comique significatif）」，グロテスクなもの（le grotesque）」によって引き起こされる「笑い」を「絶対的滑稽さ（le comique absolu）」と呼んで区別しているが，その何方にも属さない例外的な「笑い」として，次のような笑いを挙げている：

> 滑稽なもの，笑いの原動力は，笑う者の側にあって，笑いの対象の側にあるのでは決してない。ころんだ者が自分の失敗（chute）を笑うことは決してない。もっとも，これが哲人である場合，習慣によって，すぐさま自己を二重化し（se dēdoubler），おのれの「自我（moi）」の諸現象に局外の傍観者として立ち会う力を身につけた人間である場合は話が別であるが。しかし，そういう場合は稀である。[18]

自己を二重化し、同時に《chute》の最中に在る当事者と，その《chute》に対して全く関係のない観客になって，自らの固有のものであるはずの《chute》をもうひとりの自分が「笑う」こと。これはまさしく，われわれが見てきたバタイユの《rire》そのものではないか。

そして，それはFreudが「自身を子供のように扱い，それと同時に（自分自身である）その子供に対して優越した大人の役割を演じる」ことと定義した「ユーモア的精神態度（humorous attitude）[19]」ともぴったり重なる。Freudはさらにその「ユーモア的精神態度」の特徴について次のようにも語っている：

> 以上を総括して，我々は次のように言っていいだろう。ユーモア的精神態度（humorous attitude）は，その内容がどうであれ，ユーモアの発話主体の自己（self）と他の人々との両方に向けられる。こういう態度をとる人にとって、この態度は快感（pleasure）の大量産出をもたらすと推定され，そして，同じ量の快感が局外の見物人にも共有されるところとなる，と。[20]

「ユーモア的精神態度」は事象に関与している主体（当人）だけではなく，当事者ではない観客にも《pleasure》を与える，とFreudは述べている。つまり，その精神態度は「伝染性（contagieux）」という性質を持

っている，というのだ。この性質はバタイユの《rire》と実は共通しているのである。二人になった自己，二重化された自己の間に起こる《rire》は観客をも巻き込んでいくのである：

> 二人での笑いから数人の（あるいはたったひとりの）笑いへの移行は，笑いの領域の内に，エロティスムの領域と供犠の領域とを一般に分ける差異を導入する。
>
> エロティックな争いは（劇場で）見世物となることもできるし，犠牲者（victime）の殺戮は信者とその神とのあいだの媒体となることもできる。愛もまた，供犠が「見世物（spectacle）」に結び付けられるように，（二つの存在［deux êtres］の）「相互侵入（compénétration）」に結び付けられる。「見世物」と「相互侵入」とは，二つの基本的形態である。この二つの関係は次の定式で示される：「伝染（contagion）」（二つの存在の内密な相互侵入）は「伝染性（contagieuse）」である（限りない反響をよぶ可能性がある）。[21]

この「同時に私であり他者である」ことによる《rire》，観客へも伝染していく《rire》とは，Freudの言う《humour》と同質のものである，と結論付けてもいいのではないだろうか。そして，Baudelaireの《rire》であり，Freudの《humour》でもあるようなバタイユの《rire》とは，他のいかなるものではなく，やはりわれわれの知っている「笑い」なのだ，と言ってもいいのではないだろうか。

5．結論あるいは passage の体験

「至高性（souveraineté）」とは何だろうか。これまでの考察を終えた私は，いまその問いに対し，それは独りで孤高にあることではなく，私でありかつ他者であることだ，とひとまず答えることが出来る。そしてそれは「笑い」の形をとるのであるから，「笑い」がそうであるように，どこからともなく現れ，束の間花開いたかと思う間もなく，夢のように消え去

ってしまうものである，と付け加えることもできる。この答えに対し，いや，他人の死はあくまで他人の死であるし，それを自分の死と見做すことは不可能なのではないか，という反論があり得るかもしれない。しかし，忘れてはならないのは、我々は主体の消滅である「私自身の死」を体験することが出来ない以上，主体が生きながら体験しうる「私の死」とは常に「他者の死」からなる《simulacre》なのだ，ということである。Batailleはこのことに意識的であった。そして彼は「私の死」が《simulacre》でしか有り得ないところに逆に「存在」の可能性を見ようとしたのだ。供儀の場合のように実際に死者を前にしていようといなかろうと，「私の死」を体験するということは，同時に「他者の死」を体験するということである。私が繰り返し言ってきた，自己を二重化するという体験は，だから，私の内部に単に二人の「私」が生じる体験なのではなくて，「私 (le moi)」が，「私」と「他者の死」である「私の死」との間を往き来する《passage》の体験のことなのである。そこでは「私」を超える存在はもはやないが故に「私」こそが（つまり「私」であり，「他者の死」である「私」こそが）《souverain》なのである。

次の一節はこのことを良く表していると思われる。私は次のバタイユの言葉で本論考を終わりにしたいと思う。「融合 (la fusion)」というのは「笑いの融合 (la fusion du rire)」のことであるが，それを「至高性 (la souveraineté)」と置き換えれば，私が今まで述べてきたことはほぼこの一節に集約されるように思われる。縷々と述べてきたことが，結局はバタイユの単純な言葉に包摂されてしまうのを見て己の無力に茫然たる思いだが，最初にも述べたとおり，それがバタイユ巡りの正しいあり方と割り切れば，いまは，とにかく歩くだけは歩ききったという満足感がないわけではない。

> 融合が私 [moi] の中に導入するものは，「一つの別の現存在 [une existence autre]」である（この「他者 [autre]」は私の中に「私のもの [mien] 」として，しかし同時に「他なるもの [autre]」とし

て導入される)。融合は，それが移行［passage］(状態［un etat］の反対物) である限り，発生するには不均一性 (hétérogénéité) が必要なのである。[22]

NOTES

(1) Derrida, Jacques, 《De l'économie restreinte à l'économie générale》 in *L'écriture et la différence*, Seuil, coll. 《Points》,1979, p. 373

(2) Kojève, Alexandre, *Introduction à la lecture de Hegel*, Gallimard, coll. Tel, 1992, p13. et 14

(3) Bataille,Georges, 《Hegel, la mort et le sacrifice》 in *OEuvres complètes de Georges Bataille* (以下0.C.) tome XII, Gallimard, 1988, p.331

(4) Hegel はこの Négativité を《Négativité de la conscience》と呼び，《Négativité abstraite》と区別した。Hegel は《Négativité de la conscience》が，「死」にさえも《action》を及ぼし，最終的には自らの生命を守ることのその必要性を強調した。

この《Négativité abstraite》について，また，それと《Négativité de la conscience》との違いについて，Derrida は以下のように語っている：

> Aller au-devant de la mort pure et simple, c'est donc risquer la perte absolue du sens, dans la mesure où celui-ci passe nécessairement par la vérité du maître et la conscience de soi. On risque de perdre l'effet, le bénéfice de sens que l'on voulait ainsi *gagner au jeu*. Cette mort pure et simple, cette mort muette et sans rendement, Hegel l'appelait *négativité abstraite*, par opposition à la 《négation de la conscience qui *supprime* de telle façon qu' elle *conserve* et *retient* ce qui est supprimé (…)》 et qui, 《par là même survit au fait de devenir-supprimée (…)》.
>
> (*L'Économie générale*, p.375)

ここでいう《négativité abstraite》とは，一見すると Bataille が《l'opération souveraine》であるとしてあげている《Négativité sans emploi》と同じもののようであるが，《Négativité abstraite》が「死」自体を表象してしまう限りにおいてはそれはやはり「死」の signification 或いは，sens となってしまうのである。

(5) Maîtreが《conscience de soi》になるためには他者の承認（reconnaissance）を得なくてはならない。畢竟それは奴の意識（conscience servile）の介在を必要とする。つまり己独りでは自らのidentitéを確立できず，従ってautonomeな存在になりえないMaîtreとは，実はその関係を通して奴（Esclave）に従属しているのである。さて，Esclaveとは，死を賭して自らを物（chose）の世界から超出させることが出来ないがゆえに奴なのであるから，Esclaveは《chose》に結び付けられるとも言える。一方，自らを死に曝すことで《chose》の段階を乗り越えたかに見えたMaîtreであるが，今や消費する（consommer）だけになった《chose》は実はEsclaveの《Négativité》たる《travail》によって変質を受けた後でしかMaîtreの消費の対象には成りえない。こうして見ると，autonomeでは有り得ないMaîtreとは，Esclaveを介して《chose》に，また《chose》を介してEsclaveに従属しているともいえるのである。(Voir) A. Kojève, *Introduction à la lecture de Hegel*, p.23

(6) Bataille, *Méthode de méditation*, O.C. V, p.213

(7) Bataille, *L'Expérience intérieure*, O.C. V, P. 100-101

(8) Corbinの手による，Heideggerの《Selbstheit》の仏訳であるこの《Ipséité》について，Sartreは，Batailleはそれを単に《individualité naturelle》の意味としてしか理解していない，と批判している。(Voir) Sartre, 《Un nouveau mystique》, p.194

(9) Bataille, *L'Expérience intérieure*, O.C. V, P.101

(10) Borch-Jacobsen, Mikkel, 《Bataille et le rire de l'être》 in *Critique* 488-489, Les Editions de Minuit, 1988, p.31

(11) Bataille, *L'Expérience intérieure*, O.C. V, P.98

(12) ibid., p.106

(13) Borch-Jacobsen, 《Bataille et le rire de l'être》 , p.38

(14) Bataille, *L'Expérience intérieure*, O.C. V, P.115

(15) Bataille, 《Hegel, la mort et le sacirfice》 in O. C. X II, p.336

(16) Derrida, 《De l'économie restreinte à l'économie générale》, p.377
この引用文中，Derridaがrireと《négativité》の違いを強調するのは，J. -P. Sartreの《Mais le rire est ici le *négatif*, au sens hegelien.》という言を受けてのことである。われわれは《négativité》の考察によって，Derridaが正しいことを知っている。

(17) Sartre, Jean-Paul, 《Un nouveau mystique》 in *Critique Littéraire* (*Situation, 1*) Gallimard,coll. 《idees》,1975, p.209

(18) Baudelaire, Charles, 《Du l'Essence du rire et généralement du

comique dans les arts plastiques》 in *Curiosités esthétiques, L'Art romantique de Baudelaire*, Bordas, Classiques Garnier, 1990, p.251

Classiques Garnier 版の編者 Henri Lemaitre は引用文の最後の箇所を受けて，《Mais c'est, évidemment, le cas de Baudelaire lui-meme！》と注を付けている。この「笑い」が，Lemaitre の言うように Baudelaire の「笑い」だとするならば，Baudelaire の《rire》と Bataille の《rire》とは同質のものであることになる。これは極めて興味深いことではないか。

(19) Freud, Sigmund, 《Humour》 in *the Complete phychological works of Sigmund Freud, volumeXXI*, London the Hogarth Press and the institute of phycho-analysis, p.164

この「大人」が超自我であり，「子供」が自我であり，自我から超自我へのエネルギーの転移がその現象を引き起こすと Freud は続けるが，このような精神分析的還元の是非についてはここでは問題にしないことにする。

(20) ibid., p.161

(21) Bataille, *Le Coupable*, in O. C. V, P.391

(22) ibid., p.391

＊ 文中，引用した文献の邦訳について，バタイユの著作に関しては出口裕弘氏による邦訳，「内的体験」，「有罪者」(現代思潮社)，デリダの著作に関しては三好郁朗氏による「限定経済学から一般経済学へ」(「バタイユの世界」青土社) を参考にさせていただいたが，文脈の都合上，若干変更させていただかざるを得なかったことを，各翻訳者の方にお詫びしつつつけ加えておく。なお，その他の引用箇所については，すべて英文，仏文原典から引用者自身の責任において邦訳を試みた。